

King Lear にみる積極的ネガティブ・ケイパビリティ

渡 邊 晶 子

要 旨

新型コロナウイルスが世界を恐怖と不安に陥れる中、「ネガティブ・ケイパビリティ (Negative Capability)」という言葉に改めて注目が集まっている。これは詩人キーツ (John Keats) が弟たちに宛てた手紙の中で一度だけ用いた表現だが、キーツ研究の枠を超えて広く関心を集めている。本稿ではキーツの勧めに従ってシェイクスピア (William Shakespeare) の *King Lear* を読み、彼の言葉が指し示すものを探ると同時に、「受動的」「消極的」などと訳されることの多いこの言葉のむしろ積極的な含意を読み取ることを試みる。

キーワード：ネガティブ・ケイパビリティ、忍耐、言葉の力、*King Lear*

はじめに

キーツ (1795-1821) が “Negative Capability” との表現を含む手紙を書いたのは、1817年12月の21日から28日の間と考えられている。夜が最も長い時期であると同時に、多くの人々がクリスマスを祝うために集う季節である。遠く離れたティンマスに住む兄弟のトム (Tom) とジョージ (George) に宛てた手紙で、ジョージの妻の二度目の夫であるジェフリー (John Jeffery) の写しによって現存している。

手紙に書かれた “Negative Capability” との言葉には強調を表すための下線が引かれているが、“King Lear” にはそれが登場人物名を指すのか、作品名を指すのかを示すヒントは残されていない。しかし、役者であるキーン (Edmund Kean) が舞台に戻った話で言及される “Richard III” (191) のように明らかに作品名を指している箇所にも、“Enobarb [us]” (144) や “Caliban” (214) のような登場人物について語っている部分にも、¹⁾ 区別をするための印は付いてないことから、どちらをも指しうると言えるだろう。本稿では、一人の登場人物のみに注目しても一つの芸術作品としての戯曲は語り得ないこと、更には、詩人がエドガーの台詞である “Hark, do you hear the sea?” (4.6.4) が耳から離れないと同年4月の手紙に記していること等から、²⁾ キーツは “King Lear” という登場人物のみならず、*King Lear* という作品を指して語っていると解釈する。また、

1817年当時キーツはシェイクスピアの戯曲を読み耽っていたという事実と手紙の中に見られる彼の様々な作品からの台詞の引用や言及、³⁾ 加えて、シェイクスピア自身の特質について論じ得るほどの資料が残されていないこと等を考慮し、⁴⁾ シェイクスピアという劇作家ではなく、彼の書いた戯曲に焦点を当てて“Negative Capability”が意味するであろうことを探っていく。

ジョン・キーツとシェイクスピア

1817年の4月、キーツはイギリス本土の南方に位置するワイト島に滞在していた。シェイクスピア作品を持参したことは周知の事実だが、彼の傾倒ぶりは尋常ではない。4月から5月にかけて兄弟や友人に書いた4通の手紙の全てにシェイクスピアへの言及が見られる。4月15日にサウザンプトンに到着し、弟のジョージとトムに最初に書いた手紙には、“I felt rather lonely this Morning at breakfast so I went and unbox'd a Shakespeare—‘There's my Comfort’”と、寂しさからシェイクスピアの戯曲を開いたと告げている。4月17日、18日に友人のレイノルズ(John Hamilton Reynolds)に宛てた手紙では、“From want of regular rest, I have been rather *narvus*—and the passage in Lear—‘Do you not hear the Sea?’—has haunted me intensely”と、*King Lear*の中で、両眼を失い自殺をしようとする父グロスター伯爵に息子エドガーが「有りもしない海」の音が聞こえないかと問う台詞が耳を離れないと告げている。5月10日に友人のハント(Leigh Hunt)に宛てた手紙では、シェイクスピアのキリスト教精神について持論を述べている。

5月10日、11日付けの友人ヘイドン(Benjamin Robert Haydon)に書いた長い手紙には、シェイクスピアへの讃辞が散りばめられている。手紙はヘイドンへの呼びかけの後、*Love's Labour's Lost*の冒頭のナヴァール国王の台詞で始まる。そして、*King Lear*でエドガーが語る岩壁にへばりついている「実在しない人物」に自らを例え、詩作の苦勞を語っている。続いて、“I remember your saying that you had notion of a good Genius presiding over you”と話題を変えると、“Is it too daring to Fancy Shakespeare this Presider?”と、自らの精神の中心的な位置を占める存在としてシェイクスピアの名を挙げている。

また、年末に会うことができず、最良のタイミングに手紙もこなかったら落胆するだろうと書いた直後には、次のように続けている。“I never quite despair and I read Shakespeare—indeed I shall I think never read any other Book much—Now this might lead me into a long Confab but I desist. I am very near Agreeing with Hazlit that Shakespeare is enough for us.”シェイクスピア以外の本はあまり読まないだろうとの極端な考えを明かした上で、シェイクスピアがあれば充分だというヘイズリット(William Hazlitt)の考えにほぼ同意しているとまで記している。更に、手紙の最後は“So now in the Name of Shakespeare Raphael and all our

Saints I commend you to the care of heaven!”と締めくくっている。シェイクスピアの名を聖者たちと同列に置き、天の加護を与える存在であるかのように扱っているのである。

このようなキーツの姿勢について、田村英之助は「キーツは、優れた人たちの影響をただ受動的に受け入れたわけでは決してない。キーツが無条件で認めていたのはシェイクスピアだけであり、キーツのこの詩人に対する敬愛の念は、シェイクスピアを自分の守り神にしたいと願っている事実に端的に現れている」(vii)と説明している。

「消極的」か「否定的」か「負」か

“Negative Capability”をいう言葉が日本でどう解釈されて来たかはその訳語からも判断できるが、藤本周一の資料からはそのほとんどに「消極(的)」「否定(的)」といった表現が含まれていることがわかる。⁵⁾ その意味するところについての解釈も様々だが、⁶⁾ アプローチも一様ではない。精神科医でもある立場から帚木蓬生は『ネガティブ・ケイパビリティ：答えの出ない事態に耐える力』との著作において『共感の土台にある「負の力」』との持論を展開している。

出口保夫はシェイクスピアのキーツに対する影響の大きさについて「キーツがシェイクスピアの高峰をのぼらなかつたとしたら、かれの一八一九年以降の芸術作品をわれわれは期待できたであろうか。おそらくその答えは否であろう」(98-99)と述べたうえで、“Negative Capability”について以下のように述べている。

詩人にとって現実の「ケイオス」(chaos)が重大なことは言うまでもない。だが、さらに大事なことは、その「ケイオス」そのもののなかに、おのれをむなしくして沈めることである。この行為をキーツは「受容能力」と呼ぶ。詩人は「カメレオン」のようなもので、没個性的なものであるとも言う。混沌から生まれる新しい世界は、その「ケイオス」が深く受容されれば、それだけ深い「リアリティ」を放つことになる。だからこの「受容能力」は、決して消極的にとられるものではなく、自己の血肉をつき破り、あるいは沸騰し、しかるのちに冷却し、静まりかえるものを忍耐づよく待つ積極的な現実受容の姿勢を示すのである。(114-115)

出口はここで、「ケイオスそのもののなかに、おのれをむなしくして沈める」行為をキーツは“Negative Capability”と呼ぶと明言し、それは「決して消極的にとられるものではなく」「積極的な現実受容の姿勢を示す」ものだと述べている。実際、彼の「受容能力」との訳には、否定的な意味は含まれていない。⁷⁾

父の事故死後数年で母を結核で亡くし、弟のトムも結核の兆候を見せ始め、やがて自らも体調

を崩し始めるキーツを取り巻くケイオスが*King Lear*に描かれたケイオスに強い関心を抱かせたであろうことは想像に難くない。しかし、精力的に詩作を重ねていた詩人が愛する兄弟達と共有しようとしていた思いは「消極的」「否定的」などと解釈されるようなものとは異なるのではないだろうか。

キーツの語る “Negative Capability”

ここでは詩人が実際に書いた言葉を確認していきたい。以下は1817年12月、二人の弟に宛てた手紙の前半部分である。

I spent Friday evening with Wells and went next morning to see *Death on the Pale horse*. It is a wonderful picture, when West's age is considered; but there is nothing to be intense upon, no women one feels mad to kiss, no face swelling into reality. The excellence of every art is its intensity, capable of making all disagreeables evaporate from their being in close relationship with Beauty and Truth—Examine *King Lear*, and you will find this exemplified throughout; but in this picture we have unpleasantness without any momentous depth of speculation excited, in which to bury its repulsiveness—The picture is larger than Christ rejected.

思うままに話題を移しながら、語るように書かれた文章からは、多くを説明せずとも二人の弟は理解すると筆者が考えていたであろうことが伺える。初めにウェスト (Benjamin West) の絵について「強烈なものが何も無い」「実在感が溢れ出る顔が無い」と批判する。それに続く文章は絵画から広く芸術に視線を向け、*King Lear*へと至っている。強調されているのは“intensity”で、それは「あらゆる不快な物を美と真実との密接な関係の中に消散させることができる」と述べる。この“intensity”についてWalter Jackson Bateは“is the concentrated life, force, and meaning of a particular” (48) と説明している。そしてキーツは、*King Lear*全体にその実例が見られるだろうと語っているのである。

以下は“Negative Capability”との表現が用いられる唯一の文章を含む、手紙の後半部分である。

Brown and Dilke walked with me and back from the Christmas pantomime. I had not a dispute, but a disquisition, with Dilke upon various subjects; several things dove-tailed in my mind, and at once it struck me what quality went to form a Man of Achievement,

especially in Literature, and which Shakespeare possessed so enormously—I mean *Negative Capability*, that is, when a man is capable of being in uncertainties, mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact and reason. Coleridge, for instance, would let go by a fine isolated verisimilitude caught from the Penetratum of mystery, from being incapable of remaining content with half-knowledge. This pursued through volumes would perhaps take us no further than this, that with a great poet the sense of Beauty overcomes every other consideration, or rather obliterates all consideration.

ここでキーツは、特に文学において人を偉業へと導く“*Negative Capability*”という特質を非常に豊かに備えた人物としてシェイクスピアの名を挙げている。そして、その特質とは、不確かさや不可解さや疑いの中にあっても、真実や理由を求めて苛立つことなくいられる状態だと説明する。例として、コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge) について述べた後、改めて「偉大なる詩人においては、美への意識がその他全ての考えに打ち勝つ、というよりむしろあらゆる考慮を消し去る」と結論づけている。これは、先述の“*intensity*”についての言及、キーツが *King Lear* を読むようにと勧めた箇所 で用いた表現と重なるものである。この日の手紙はこの後シェリー (Percy Bysshe Shelley) の詩の話に移り、弟たちへの挨拶文で終わる。“*Negative Capability*”への直接的な言及はその後の現存する手紙には見られない。

キーツは一体、シェイクスピア作品のいかなる点にそれほど強烈な美への意識を見出したのだろうか。この手紙の中で唯一、シェイクスピアの戯曲の中からその名が明記されている *King Lear* は、長年上演が不可能だと考えられていた理由として、“*its display of cruelty and suffering*”が挙げられている。⁸⁾ 果たして、あらゆる不快なものを消散させることのできるほどの強烈さや美を秘めているのだろうか。また、「不確かさや不可解さや疑いの中にあっても、真実や理由を求めて苛立つことなくいられる状態」がこの作品に描かれているとするなら、どのように表現されているのだろうか。

King Lear

King Lear について語る時には、どの版を基準に議論を進めるかとの問題が避けて通れない。本作の1608年発行のクオート版と1623年発行のフォリオ版には大きな違いがあり、20世紀後半までは二作を合わせた折衷版が編纂されていたからである。しかし、キーツがワイト島に持参したのはファースト・フォリオの復刻版(1808年版)だったということが明らかになっているため、本稿ではフォリオ版を引用しつつ考察を進めたい。

本作ではブリテン国王リアと三人の娘リーガン、ゴネリル、コーディリアを中心に進むメイン・プロットと王に忠誠を誓うグロスター伯爵と二人の息子エドガーとエドモンドを巡るサブ・プロットが複雑に交わりながら物語が進む。サブ・プロットで起こる出来事がメイン・プロットに深く関わり、重大な影響を与えることがこの作品の特徴の一つとも言えるが、リアは常に物語の中心に座している。リアを取り巻く過酷な世界の他に、リアに認知されることなく広がる混沌とした世界が存在し、“Shakespeare’s ‘greatest achievement’ but ‘too huge for the stage’” と Andrew Cecil Bradley (1851-1935) に言わしめた壮大さを創り出している。

権力としての言葉

King Lear において主人公リアは、絶対的な権力を持つ年老いた王として登場し、その傲慢さを極めた振る舞いと娘たちの真意への無理解に加え、愚直だが心優しい末娘を勘当したことから、財産も権力も譲った長女と次女に裏切られて全てを失う。暴風雨の中を彷徨い、寒さと二人の娘たちへの怒りに震える中で、見えていなかった真実に気づくのだが、やがて理性さえも失い、最終幕では死を迎える。本稿では言語行為論の観点から台詞を分析し、リアと周囲の登場人物との関係の変化を明らかにしていきたいと思う。

第1幕ではリア王の言葉はリア本人を含め皆が理解していて、現実となる。彼が与えると言えど与えられ、奪うと宣言すれば奪われるのである。その言葉の持つ絶対的な力は、リア自身も十分認識している。

LEAR. Hear me, recreant, on thine allegiance, hear me:

That thou hast sought to make us break our vows,

Which we durst never yet, and with strained pride 170

To come betwixt our sentences and our power,

Which nor our nature, nor our place can bear,

Our potency made good, take thy reward. (1. 1. 168-73)

168行目の初めと終わりで繰り返される“Hear me”は、“epanalepsis”と呼ばれる隔語句反復のレトリックで、「私の言葉を聞け」と強く訴えるこの表現は、リアがこの後に語る言葉が実行力を伴ってケント伯爵に及ぶことを伝えている。注目したいのは“Hear me”に挟まれた言葉、“recreant”がここで何を意味しているのかである。ケントに怒りを燃やして、彼を不忠者と呼ぶのは、「王であるリアの誓いを破らせようとしている」ことと「すでに下した宣告と王の権力の間に割り込んだ」ことが理由として挙げられている。つまり、リアの言葉の不可侵性を尊重し

なかったことが問題視されているのである。169行目から、“us,” “our,” “we”が用いられているが、これはリアが“royal we”を用いて君主として発言していることを表している。この宣言の前には、リアは自身を指す言葉に“**I**”を用いてケントに言葉を発していることから、ここで語られた言葉の重みはケントのみならず、周囲の全ての登場人物に認識されるべきものなのである。この後リアは「10日経っても領内にいるのがわかれば、見つけ次第即刻死刑だ」と宣告するのだが、その言葉は“**By Jupiter, / This shall not be revoked**” (1. 1. 179-80) と、ローマ神界の主神であり天界を支配するジュピターにかけて断じて取り消さないと強調される。⁹⁾

このように、リアがいかに実行力と結びつけて言葉を発しているかに目を向けると、自分をどれ程愛しているかを語れと三人の娘に命じたことも「愚かしい」とばかりは言えないのである。リアの激しい気性や頑固さ、心にも無い美辞麗句を並べる姉娘たちの狡猾さ、“**Nothing, my lord**” (1. 1. 97), “**Nothing**” (1. 1. 89) と答える末娘の不器用さなど、登場人物の性質に悲劇の原因を見出すことも可能だが、言葉の重みの捉え方の違いが悲劇の始まりだったとも言えるのではないだろうか。リアにとって言葉は、人々に恵みを与える道であり、時には人の価値さえも否定して命を奪う矢ともなる「力」そのものであったのである。

しかし、領土を長女と次女、それぞれの夫に譲った直後に、リアの言葉の絶対性は既に損なわれ始めていることが二人の娘の言葉から読み取れる。

GONERIL. You see how full of changes his age is. The 290
 observation we have made of it hath not been little.
 He always loved our sister most, and with what poor
 judgement he hath now cast her off appears too grossly.
 REGAN. 'Tis the infirmity of his age, yet he hath ever but
 Slenderly known himself. 295
 GONERIL. The best and soundest of his time hath been but
 Rash; then must we look from his age to receive not
 Alone the imperfections of long-engrafted condition,
 but therewithal the unruly waywardness that infirm
 and choleric years bring with them. (1. 1. 290-300) 300

リアが年を取り、気まぐれが増したことをゴネリルが指摘し、“**poor judgement**” とあからさまに父王を批判すると、すかさずリーガンも“**infirmity of his age**”、つまり「耄碌した」と露骨に父王を蔑むような表現で応える。更に、“**he hath ever but / Slenderly known himself**” と続けるが、これは曖昧な表現で、文字通り解釈すると、リーガンはリアの国王としての人格と彼の

言葉がもたらす結果のバランスが取れていないことを昔から感じていたとも受け取れる。妹が同調者であることを確認したゴネリルは、リアの性格を“rash”であると言い、“the imperfections of long-engrafted condition”とさえ述べる。続く 299. 300 行では「短気な老いばれにありがちの無理なわがままで迷惑することになりかねないわ」（河合 24）と、敬意の欠片も感じられない言葉を口にするのである。

二人の娘はこの後すぐ保身に動き、結託してリアの排除に乗り出す。ブリテン国の領土と権力の全てを娘たちに分割譲渡した後のリアは、もはや恐れるべき存在でも、敬うべき存在でも、ましてや愛すべき存在ではなく、蔑むべき老人と化しているのである。そして、彼の「力」そのものであった言葉は、空回りを始める。

リアの苦悩と忍耐

誰もが自分の言葉に従うという人生が一転したことにリアも次第に気付いていく。“You, you, sirrah, where’s my daughter?” (1. 4. 44) と言葉を掛けたリアに “So please you—” とだけ答えてゴネリルの執事オズワルドはその場を去る。“sirrah” は “a form of address expressing authority and / or contempt” と説明されることから、¹⁰⁾ リアは以前と変わらぬ態度で周囲に接していたことが伺える。一方、オズワルドの答えは “excuse me, I’m busy” にあたる表現で、本来なら国王が耳にすることは無いはずである。そして、王の問いは単に娘の居場所を教えることを求めているのではなく、「王たる自分が娘を探しているのだから、見つけて連れてこい」という意味を含んでいたはずである。全く予想外の反応に立腹したリアは従者にオズワルドを呼び戻すよう伝えるが、執事は戻ろうとしない。その後彼を見かけたリアは、“O you, sir, you, come you hither, sir: who am I, sir?” (1. 4. 76) と声を掛ける。繰り返される “sir” は嫌味に他ならないだろう。期待をしたであろう平身低頭な謝罪に反して、オズワルドは “My lady’s father” と答える。リアは激しくののしるが、オズワルドは相手にしない。

リアのアイデンティティの確認は続く。リアと彼の従者の行状を厳しく非難するゴネリルに、リアは “Are you our daughter?” (1. 4. 209) と、“royal we” を用いて聞く。しかし、ゴネリルは一瞬おいて、知恵を働かせるように勧めるのである。リアは “Does any here know me?” (1. 4. 217) と周囲に問いかけ、自分が置かれている状況が理解できないかのような言葉を口にした後、自分はリアであるはずがないと “Who is it that can tell me who I am?” (1. 4. 221) と再度問いかける。だが、ブリテン国王の称号とその榮譽は保持しているはずのリアに敬意を示しつつ答える人はいない。リアの言葉には人を動かす力はもはや無くなっているのである。道化が “Lear’s shadow” (1. 4. 222) と答える。既に国王としての実体が無いことを伝えているとも受け取れる言葉である。

王としての自分も、言葉に内在していたはずの力も消えてしまったかのような状況が理解できずに混乱するリアの様子が2幕2場のグロスターとの会話に端的に表れている。リーガンの城に着いたリアは、話がしたいと言っているのにリーガン夫妻が出てこない状況が受け入れられない。

LEAR. Why, Gloucester, Gloucester, 285
 I'd speak with the Duke of Cornwall and his wife.
 GLOUCESTER. Well, my good lord, I have informed them so.
 LEAR. 'Informed them' ? Dost thou understand me, man?
 GLOUCESTER. Ay, my good lord,
 LEAR. The King would speak with Cornwall, the dear father 290
 Would with his daughter speak, commands — tends — service. (2. 2. 285-291)

王が望みを伝えることは、それが実現することと同義なはずであった。馴染みの忠臣にリアは“Dost thou understand me, man?” と、“thou” に怒りを込めて問いかける。グロスターの返答は以前と変わらぬ言葉遣いだろうが、リアの願いを叶えるためにリーガン夫妻を引きずり出そうとはしない。リアの王としてのプライドは崩れ始めたのが 290, 230 行目から読み取れる。自らを“The King”と呼んで話を始めたが、“the dear father”を加え、“commands”と言ったものの“tend”と言い直している。「国王がコーンウェル公に話がある」といった命令から「高貴な父が娘と話したい」といった願いへと、大きく意味を変えている。リアが譲歩をせざるを得ない状況を把握した場面と言えよう。

実際、リアは“I'll forbear” (2. 2. 298) と、我慢を口にしてしている。だが、使者として送ったケントが目の前で足枷をはめられた状態にあるのに気づくと“Death of my state!” (2. 2. 301) と怒りを新たに、再び公爵夫妻に面会を求める。その口調は張り裂けんばかりの怒りに満ちている。“Go tell the Duke and's wife I'd speak with them, / Now, presently: bid them come forth and hear me, / Or at their chamber door I'll beat the drum / Till it cry sleep to death” (2. 2. 305-8). 燃え上がる怒りが激しい鼓動となって皮肉にもリアの心臓のドアを激しく打ち叩き、死を招きそうな状態となっていることが次の一文から読み取れる。“O me, my heart! My rising heart! But down!” (2. 2. 310).

やがて姿を見せたリーガンは、ゴネリルの城に戻るようリアに告げ、コーンウォールはケントに足枷をはめるよう命じたのは自分だと言う。更に、到着したゴネリルの言葉に同調し、リーガンはリアに従者は一人も必要なのではないかと迫る。リアは“need”の問題では無いと言う。「どんな卑しい乞食でも貧しさの底に必要以上のものは持っている」と述べ、絶望的な思いで次

のように語る。“But for true need — / You heavens, give me that patience, patience I need! / You see me here, you gods, a poor old man, / As full of grief as age, wretched in both:” (2.2.459-62). 衝動的な怒りを抑えるため、リアは神々に自分に必要な“patience”を求める。反復が思いの強さを伝えている。自分の言葉が全て効力を生じたのは過去のことで、財産を譲渡した際に交わした条件は反故にされ、自分を誰よりも愛するといった娘たちは真剣に耳を貸そうともしないのである。リアはなお言葉を発し続け、怒りは復讐心が変わるが、成す術もない。嵐が近づく中、道化と共に城を後にする。娘たちは無情にも城を閉ざす。

雨風や寒さを防ぐ物さえ無く、嵐の中、怒りに身を任せて叫ぶリアだったが、一時冷静さを取り戻して“**No, I will be the pattern of all patience, / I will say nothing**” (3. 2. 37-38) と口にする。しかし、ゴネリルとリーガンへの怒りは収まらず、道化を気遣う優しさを示すと間もなく、正気とは思えないような言葉を発するようになる。狂ってしまったリアは、復讐どころか、自ら問題を解決する道を完全に失ってしまう。

リアを思う人々の苦悩と忍耐

ゴネリルとリーガンの裏切りに対抗する術もなく、恩も情もない仕打ちに声を荒らげても相手にされず、嵐の中、大自然に向かって二人の娘への怒りと呪いの言葉をぶちまけるしかなかったリアも、先が全く読めない、答えが出ない状況の中で「耐える力」を発揮したと言えなくはないだろう。しかし、その姿は“when man is capable of being in uncertainties, Mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact & reason” との表現からは大きくかけ離れてはいないだろうか。むしろ、王の傲慢さ、身勝手さ、頑固さを知った上で、肉体的・精神的に痛みを負いながらも見返りを求めずに誠意を尽くす人々にキーツの目は注がれたとは考えられないだろうか。

実際、不条理な仕打ちにあっても「なぜか」と問うのはリアだけなのである。“If for I want that glib and oily art / To speak and purpose not- since what I well intend, / I'll do't before I speak” (1. 1. 226-28) と必死に訴えたにもかかわらず、“Go to, go to, better thou / Hadst not been born than not to have pleased me better” (1. 1. 235-6) との残酷な言葉を最後に父親に捨てられるコーディリア、王の衝動的な決断を何とか思いとどませようとして追放を言い渡されるケント、忠告を聞いても変わらない王に従って暴風雨の中を彷徨う道化など、理不尽な状況を受け入れ、耐える登場人物は *King Lear* には何人もいる。中でもエドガーは、注目に値するだろう。

伯爵の嫡男として生まれ育ったエドガーは、弟エドマンドの悪意に全く気付くことがなかった。庶子として父親に冷遇されてきたことを恨んでいたエドマンドは、エドガーが父殺しを企てていると父親に信じ込ませ、「悪党」の汚名を着せて兄を家から追放してしまう。エドガーは生き延

びるために気遣い乞食のふりをして逃げるが、自分を信じてくれなかった父を恨むことも、弟を疑うこともなく、嵐の夜に偶然出会ったリアに同情を寄せる。そして、変わり果てた姿の父親に出会うと、身分を隠したまま助けるのである。

リア王を助けようとしたためにリーガン夫妻によって両眼をえぐり取られたグロスターはドゥーヴァーの崖から飛び降りて死のうとする。しかし、乞食の振りをして手を引いていたエドガーは父を騙し、「崖から落ちたのに助かった」と信じ込ませる。そこでグロスターは次のように語り、エドガーがそれに答える。

GLOUCESTER. I do remember now. Henceforth I'll bear 75

Affliction till it do cry out itself

'Enough, enough' and die. That thing you speak of,

I took it for a man. Often 'twould say

'The fiend, the fiend'; he led me to that place"

EDGAR. Bear free and patient thoughts. (4. 6. 75-80) 80

人の想像を超えるような恐怖と痛みをリーガン夫妻にもたらされ、自ら命を絶ったはずのグロスターが「これからはいかなる苦しみにも耐え」と語るのである。詳細は知らないまでも、自分のでまかせの嘘にも全く気づかない、人を疑わない哀れな姿の父のその言葉に、エドガーの心も痛んだことだろう。そして、80行目では“free”、“patient thoughts”という二つのアドバイスをす。これらの語をR. A. Foakesは“untroubled, innocent”、“the capacity to endure suffering”と説明しているが、松岡はこの台詞を「くよくよせず、気を楽しにもつことだ」(191)、野島は「くよくよせず辛抱強くかまえていることです」(225)と訳し、福田訳は「もう恐れる事は無い、気を大きく持つ事だ」(158)、河合訳は「もう思い悩まないで」(142)となっている。何もかもが不確実な状況にあって、張り裂けんばかりの悲しみを隠して発せられたであろうエドガーのこの台詞は、ネガティブ・ケイパビリティの本質を表わしているかのようである。

キーツの変化

キーツは1818年1月23日にジョージとトムに宛てた手紙の中に“On sitting down to King Lear once Again”と題するソネットを書いているが、詩の直前には興味深いことが記されている。以下はキーツが“Negative Capability”について語ってからおよそ一月後に書いた文章である。

I think a little change has taken place in my intellect lately—I cannot bear to be

uninterested or unemployed, I, who for so long a time, have been addicted to passiveness—Nothing is finer for the purposes of great productions, than a very gradual ripening of the intellectual powers—As an instance of this—observe—I sat down yesterday to read King Lear once again the thing appeared to demand the prologue of a Sonnet, I wrote it & began to read—

キーツは長く受動的である状態にいることに耐えられなくなったと言っているのである。そして、*King Lear* を改めて読む決意をしている。理由として、偉大なものを生み出すために最適な “a very gradual ripening of intellectual powers” を経験するためだと書いているのだが、それはつまり、“Negative Capability” の “Negative” は、受動的や消極的と解釈されるべき言葉ではないといえるのではないだろうか。

キーツが書いたソネットの中程には、以下のようなくだりがある。

Adieu! For once again the fierce dispute,
Betwixt Hell torment & impassioned Clay
Must I burn through; once more assay
The bitter sweet of the Shakespeareian fruit (sic)

大文字の C で始まる “Clay” を「肉体」と解釈すると、耐えがたい精神的苦痛に肉体的苦痛が加わり、肉体と精神が乖離してしまったリアや、肉体と精神の両方に耐えがたい苦痛を同時に強いられて死を望んだグロスターの苦難が連想される。しかし、“The bitter sweet of the Shakespeareian fruit” にある “sweet” は何を指しているのだろうか。

コーディリアに見る “Negative Capability”

受動的であり続けることからの脱却を決意したキーツが言及した “sweet” を探るべく、リアとコーディリアの最後の別れの場面の分析を試みたいと思う。1 幕 1 場でリア王に絶縁され、フランス王の妻としてブリテン王国を去って以降、コーディリアは 4 幕 3 場まで登場しない。しかし、2 幕 2 場でケントが預かった手紙の差出人は彼女で、状況を理解した上で父王を庇護するためフランス軍と共にドーヴァーに上陸する。リアとコーディリアが直接言葉を交わすのは、4 幕 7 場である。

ここでの二人の会話はほぼ噛み合っていない。コーディリアの問い掛けにリアはただ起こされたことへの不満を語り、“Sir, do you know me ?” (4. 7. 48) との末娘の問いかけにも “You are

a spirit, I know; where did you die?” (4. 7. 49) と、ふざけているかのような質問を返す。コーディリアは “my royal lord” “your majesty” (4. 7. 44)、“sir” (4. 7. 48, 57, 59)、“your highness” (4. 7. 82) と、リアへの敬意を以前と変わらぬ言葉で表すが、リアは正気とも狂気ともつかぬ物言いで、¹¹⁾ コーディリアの前に跪いて彼女を慌てさせ、“pray” (4. 7. 59, 71, 83) を繰り返す。リアは命令口調でないだけでなく、「頼む」のである。更に注目すべきは、48 行目、57 行目、70 行目、75 行目の “shared line” である。これは、リアに何とか王としての自分を取り戻してほしいと願うコーディリアの急いた気持ちの表れと解釈できるが、同時にそれを許すリアには絶対的な権力者としての自覚は存在していないことを象徴している。リアの回復を信じて言葉をかけ続けるコーディリアを前に、狂気に逃げながらも、リアは少しずつ断片的な記憶に辿り着いていく。これほどの混沌とした状況において間髪を容れずに発せられる真剣な言葉によって生み出される、有り得ないような父と娘の会話をリアルに感じさせるほどの緊張感が生み出すものこそが、キーツが指し示す “intensity” といえるのではないだろうか。

リアを休ませるために一旦退場した二人が次に姿を見せるのは5幕3場である。リアとコーディリアはエドモンドと兵士たちに捕虜として連れられて登場する。

CORDELIA. We are not the first
 Who with best meaning have incurred the worst.
 For thee, oppressed King, I am cast down; 5
 Myself could else outfrown false fortune’s frown.
 Shall we not see these daughters and these sisters?
 LEAR. No, no, no, no. Come, let’s away to prison;
 We two alone will sing like birds i’ the cage.
 When thou dost ask me blessing I’ll kneel down 10
 And ask of thee forgiveness. So we’ll live
 And pray, and sing, and tell old tales, and laugh . . . (5.3.3-12)

ここでのリアは意味不明なことは口にしない。理性も記憶も取り戻し、自分と愛娘が置かれた状況も把握できている様子を見せる。コーディリアは年老いた父を解放する可能性を求めて最後の手段を提案する。諦めてはいないのである。しかし、リアは “no” を4回繰り返してその提案を完全に否定する。更なる悲劇を想像できない老王は、遠い昔に平和に暮らした時のように、思い遣りの気持ちだけで幸せでいられるとでも言うかのように、二人で牢獄の中で生きていこうと口にするのである。父親の言葉に娘は一言も返さない。王の言葉の空しさを黙って受け止めて従い、エドモンドの毒牙にかかるのである。そして、それを知った王も死ぬ。

コーディリアは「ただ耐える」だけの存在として描かれてはいない。人間性を失った権力者たちによって不確実さの中に投げ込まれ、不可解さや疑念を拭う手段も暇もない状況にあっても冷静さを保ち、敬愛する老いた父王のために最善を尽くすことを止めない。死が目前に迫っても、愚かな父や残忍な獣と化した姉たちを責めることもなく、運命を静かに受け入れる強さを発揮する。キーツはそのような姿に“sweet”と感じられるものを見出し、そして、あらゆる不快なものを消散させることができるほどの美や真実が表現されているのを感じたのではないだろうか。

おわりに

本稿では*King Lear* という壮大な悲劇を読んで、キーツが見出した“Negative Capability”との概念に近づかんとする試みを行った。同時に、日本語で「消極的」「受動的」とされることの多いこの言葉の訳が、*King Lear* のあらゆる場面に見いだせる美と真実に密接に結びついた現象を説明する言葉として相応しいのかについて文学研究の立場から検証してみた。

主人公のリアは、誰をも従わせる権力者として自らを認識し、最愛の娘であったコーディリアが期待した振る舞いを見せなかったことに激怒し、絶縁して無一文の状態でフランス国王に引き渡し、長年忠義を尽くしてきたケントをも怒りにまかせて追い出す。彼らがその後どうなるのかなど、気にもしない。リアの想像力の欠如は、自らの決断が招くことになるリスクにも、ゴネリルとリーガンの真意にも注意を向けさせない。だが、全てを失った後初めて、自分に従う無力な道化を気遣い、自らの過去の傲慢さを悔いる。しかしながら、娘二人への恨みの念に強く支配され、支離滅裂な言葉を口にする状態に陥ってしまうリアは、“Negative Capability”を体現する中心的存在とはいえないだろう。

一方、身勝手に残酷な娘たちや彼女らに阿る人々以外の多くの登場人物は、理不尽な状況に追い込まれても運命に抗おうとはしない。コーディリアは父王の独善的で傲慢な態度にも、姉たちの非情な言動にも怒りを露わにすることはない。エドガーも自分を信じずに弟の口車に乗った父親に恨み言の一つも言わない。しかし更に注目すべきは、「耐える人々」は同じ状態に留まり、状況が好転するのをひたすら待っていたわけではないという点である。コーディリアは父が姉二人に虐待されていると知ると夫と共にフランス軍を率いて救出に向かう。エドガーは父親の命を狙うオズワルドを殺し、裏切り者の弟エドモンドを謀反の罪で告発した後、自らの剣で彼をも倒す。ケントも、グロスターも、ゴネリルの夫オールバニー公爵も、時を見極めて、愛する人を救おうと危険を顧みずに行動を起こすのである。そのような彼らの姿にキーツは「全ての考えに打ち勝つ美への意識」を感じ取ったのではないだろうか。

以上の分析から、本稿はキーツが「シェイクスピアが法外に保持していた特質」であるとした“Negative Capability”は、答えの出ない事態やケイオスの最中にあっても心を落ち着かせて耐

えることに重点を置いて解釈すべきものではないと考える。忍耐の先を見据えて行動を起こす備えをし、不条理に屈せず実際に立ち上がる能力、出口の言う「積極的な現実受容の姿勢」と捉えるのが適当なのではないだろうか。そう考えるならば、現代を生きる私たちに今、必要な能力とも言えるのではないかと思う。

注

1. どちらもシェイクスピアの戯曲に登場する。“Enobarb [us]”は*Antony and Cleopatra*に登場するアントニーの友人である武将、“Caliban”は*The Tempest*に登場する半獣人。
2. キーツが書いた手紙では“Do you not hear the Sea?”と、“not”が書き加えられている。
3. 例を挙げるなら、1817年4月にレイノルズに宛てた手紙には*King Lear*のエドガーの台詞と*The Tempest*のプロスペローの台詞からの引用が、5月にハントに宛てた手紙には*A Midsummer Night's Dream*の妖精パックを連想させる表現、*Measure for Measure*のイザベラの台詞と*Twelfth Night*のマライアの台詞からの引用、更には*Hamlet*のハムレットの台詞を連想させる表現が用いられている。
4. 21世紀に至っても、作家個人を物語る資料はほとんど発見されていない。Stephen Greenblatt, 1～13頁。
5. 藤本周一、21～27頁。
6. 前掲論文、17～20頁。
7. 『キーツとその時代』においては、出口は「これまでたどって来た詩人の精神史のコンテクストにおいて解釈するならば、近代自我の超克を示唆するものと読み取ることができる。つまり「自己滅却」なしに、他者の理解、外界の事物の把握はあり得ないということを意味する」とし、「消極的受容力」と訳している(257-258頁)。
8. R. A. FoakesによるIntroduction(1頁)。
9. ジュピターは気象をつかさどり(ランダムハウス英和大辞典第2版)、雷電を武器とする(研究社新英和大辞典電子増補版)とされ、この誓いが後の嵐の体験に繋がるとも解釈できる。
10. R. A. Foakesによる脚注(194頁)。
11. シェイクスピア作品の中には、*Hamlet*のオフィーリアや*Macbeth*のマクベス夫人など、正気と狂気の狭間の状態にある登場人物が深遠な言葉を口にする場面は他にもあるが、この場面でのリアは狂気ではないにせよ、目の前の状況すら理解できていないと解釈できるだろう。

参考文献

- Adamson, Sylvia, Lynette Hunter, Lynne Magnusson, Ann Thompson and Katie Wales. *Reading Shakespeare's Dramatic Language: A Guide*. London: Thomson Learning, 2001. Print.
- Bate, Walter Jackson. *Negative Capability: The Intuitive approach in Keats*. 1939. New York: Contra Mundum, 2012. Print.
- Greenblatt, Stephen. “The Traces of Shakespeare's Life” *The New Cambridge Companion to Shakespeare*. Ed. Margreta de Grazia and Stanley Wells. Cambridge: Cambridge UP, 2010. 1-13. Print.
- Letter #37: To George and Tom Keats, 21-27 [?] December 1817. The Keats Letter Project. Web. 29

Dec. 2021.

Nicholls, Ellen. “‘Drear-Nighted December’ and the Bicentenary of Keats’s Negative Capability Letter.” *British Association for Romantic Studies (BARS) Web*. 24 Nov. 2021.

Rollins, Hyder Edward, ed. *The Letters of John Keats: 1814-1818*. 1958. Cambridge: Cambridge UP, 2011. Print.

Shakespeare, William. *King Lear*. Ed. R. A. Foakes. 1997. London: Thompson, 2007. Print. The Arden Shakespeare.

Short, Mick. *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose*. Harlow: Pearson Education, 1996. Print.

シェイクスピア『新訳 リア王の悲劇』河合祥一郎 訳 KADOKAWA、2020年。

——『リア王』福田恆存 訳 新潮社、1967年。

——『リア王』松岡和子 訳 筑摩書房、1997年。

——『リア王』野島秀勝 訳 岩波書店、2000年。

ジョン・キーツ『詩人の手紙』田村英之助 訳 富山房、1977年。

出口保夫『キーツ 人と作品』白鳳社、1974年。96-119頁。

——『キーツとその時代（上）』中央公論社、1997年。248-279頁。

帯木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版、2017年。

藤本周一「John Keats: “Negative Capability” の「訳語」をめぐる概念の検証」『大阪経大論集・第55巻第6号』、2005年。5-27頁。

帯木蓬生インタビュー 朝日新聞デジタル 2020年4月12日。